

## 伝統木造建築の屋根技術～瓦から分かること～

渡 邊 誠  
(香川県教育委員会)

### 1 瓦から分かること（文様・製作技術・変遷（年代））

#### 1) 瓦の歴史

##### 江戸時代以前

7世紀後半～ 寺院造営（以後、続く）、藤原京への供給

11世紀後半～ 平安京への供給

16世紀末～ 城郭での瓦の使用

##### 江戸時代以降

17世紀～ 城・寺院・城下町・限定的な住宅

19世紀後半～ 寺院・公共施設・住宅

#### 2) 主な軒瓦の種類と特徴（江戸時代後半以降を対象に）

##### ①軒丸瓦

珠文+巴文、巴文のみ、蛇の目、石持（平坦）、万十（凸型面になるもの）

##### ②軒平瓦（半裁花菱文等）

多様な文様、半裁花菱文（18世紀中頃以降）→凹型化→平坦面化

江戸時代（東讃・小豆島（大坂系）、高松（檀紙・御厩系と新瓦町系）、丸亀（丸亀藩系））

高松は唐草の表現で細かな時代がわかる

唐草上部が弱く肥厚するもの（A）

唐草全体が太く肥厚するもの（B）

文様のデフォルメ化、瓦当面一杯に太く肥厚した唐草を配置するもの（C）

##### ③軒棧瓦

18世紀中頃以降に出現するが、定着は近代以降か。

軒丸と軒平の組み合わせ：棧瓦部の凹型化（蛇の目）→平坦面化（石持）→凸面化（万十）

讃岐では、左棧瓦（逆棧瓦／左軒瓦）と呼ばれ、向かって右側に棧があるものが一般的。

#### 3) 瓦の組み合わせと年代

現状での試案：類例の増加による組み合わせや年代の精度の向上を図り、組み合わせの地域的な特徴や年代的なずれなどについても検討が必要。

19世紀第1四半期以降：軒丸瓦1類と軒平瓦1A類の組み合わせ

19世紀中頃までに軒丸瓦2類との組み合わせが出現。

19世紀後半～：軒丸瓦1類と軒丸瓦2類、軒平瓦1B・1C類

19世紀中頃に1B類、1C類が短期間で出現し、軒平瓦1C類は

19世紀中頃～明治35年（1902）頃まで

20世紀第1四半期：蛇の目と凹型

20世紀第2四半期（大正時代末期／昭和時代初期）

：石持・万十と石持型、石持軒棧瓦は、大正期に出現していた可能性、

万十軒棧瓦は同時期もしくはそれ以後

#### 4) 瓦の刻印

- ・瓦の生産者／生産地が分かる
  - ・江戸時代後期（19世紀以降）に普及。
  - ・軒丸瓦、丸瓦は凸面、軒平瓦は外縁左右のいずれか、平瓦は狭端部の見える箇所を押印。鬼瓦は側面にへら描き、正面に押印
  - ・変遷（生産者（製作者）→商品名（ブランド名））
    - ①16世紀末から19世紀初頭：記号（家紋等含む）
    - ②19世紀前葉以降：「地名＋人名」／「人名の略称」、「地名＋屋号」／「屋号の略称」
    - ③19世紀前葉以降：「地名＋姓／屋号＋人名」
- \*②③は重複しながら進展

##### ■高松を中心とした瓦生産の事例

###### 檀紙・御厩村周辺での生産

- ・御用瓦師 二大巨塔の出現  
檀紙村の辰蔵（1800～1860年代？）と御厩村の多田傳右衛門満昌（1800～戦前）  
「傳右衛門」は昭和初期でも老舗ブランド（多田家5代目多田雪次？）  
史跡高松城跡（内堀以内の櫓等の建物）  
旧高松藩領の四国霊場札所寺院（檀紙・御厩系瓦）
  - ・屋島寺 文化4（1807）年建築の御成門の鬼瓦（傳右衛門）
  - ・国分寺 文化5（1808）年、文化14（1817）の平瓦（傳右衛門）
- そのほかの瓦師  
御厩村：「伊三郎」「喜代蔵」「カネヤ」「中谷」  
檀紙村：「菊次郎」「富治郎」「富次」（鬼瓦）  
鬼無村：「横倉」
- 参考：昭和2年の『日本瓦業総覧』（井上1927）記載の檀紙村の瓦生産者  
多田雪次、妙見茂太郎、植野伊太郎、喜多瓦工場、多田正義、井上竹治  
香川才助、多田要、中谷守太、真鍋政一  
→刻印と対応しない。生産者の盛衰もあった？

##### ■城下：瓦町周辺

- 「新瓦町系」 刻印：「水谷」「玉屋」（1800～1900？）  
「岡野屋」「三宅」（1900～）
- 昭和2年の『日本瓦業総覧』（井上1927）の記載  
西瓦町の太田瓦工場、新瓦町の岡野利吉、松島町の三宅藤太郎、亀井房吉、関森瓦工場  
→「岡野屋」「三宅」は生産を継続。旧城下から郊外へ（松島町）

##### ■そのほかの瓦生産～林村周辺

- 「林善右衛門」／「林善」「林村 河野彦吉」  
「上林岡崎」／「□（木）田郡林村 瓦製造人 岡崎佐太郎」／「岡」  
「池田邑喜代次郎」／「池喜」
- 昭和2年の『日本瓦業総覧』の記載：「岡崎豊一」岡崎佐太郎の後継？
- 実際の供給先事例
  - ・下林小学校（明治8年）／林村立林尋常小学校（明治25年）の創設、翌年落成校舎、校舎増築時（明治41年／大正7年）
  - ・登録有形文化財（建造物）真鍋家住宅（明治8～20年頃）
  - ・旧井上家住宅（郷屋敷）（明治前半期）
  - ・六条町の高原水車（登録有形民俗文化財）：「喜代次郎」／「池喜」

## 5) 分布

江戸時代：地域で傾向がまとまる

- ・小豆島：橘文（大坂系）・岡山系
- ・東讃地域（さぬき市志度町以東）の海浜部、小豆島：橘文（大坂系）  
東かがわ市の猪熊家住宅の役物瓦のへら書き「乙卯寛政七年 淡州津井村 瓦屋」  
さぬき市津田町の実相寺の鬼瓦のへら書き「網干伊津浦 山本半十二郎作」  
→淡路島や兵庫県たつの市御津町伊津浦など
- ・高松藩領（東讃地域、高松藩領の中讃地域を除く）：半歳花菱文（高松藩系）  
綾歌郡宇多津町、綾川町、坂出市周辺が境界線（入り組んで分布）
- ・三豊郡などの西讃地域、丸亀藩・多度津藩領～高松藩領の南西部：蔦葉文

近代以降：生産地が増加し、文様も多様化

## 2 瓦の調査について

### 1) 前提

- ・瓦だけで年代を細かな年代は特定できないが、ある程度の時期を絞り込むことは可能
- ・必ずしも棟札が示す年代と葺かれている瓦の年代は一致しない。  
→建築当初若しくは大規模修理を直接的に示すわけではなく、修理の最終段階を反映しており、様々な観点からの判断が必要

### 2) 建物の時期や修理などの歴史に関する調査を行う際の視点

- ① どのような文様の瓦があるのか  
一種類なのか複数なのかで見方が異なる。多くの場合は、複数の瓦が使用されている。  
ストックされている古い瓦はないか。
- ② 各文様のものがどのくらいあるのか＝文様の比率（主体となるものは何か）  
→・最も多い数量のものが建築当初材の可能性が高い  
・修理によって、吹き替えられる事例もある。  
古い瓦は当初材の可能性、新しい瓦は葺き替えた瓦の可能性  
ただし、古い瓦を部分的な修理に使用している可能性もある。  
・複数の瓦を用いて葺いている場合もある  
→建物の構造や特徴と合うか？建物の修理や増築はないか  
・他の建物の瓦を使用している場合もあり、敷地内の建物との比較も重要
- ③ 修理記録はあるのか＝棟札などの資料との照合
- ④ 建物の価値の視点  
文様や刻印の種類から見る  
→ 建築に関わった職人や生産地の情報  
→ 建物の位置付け  
→ 建築時の社会情勢

### 3) 方法

個々の写真を撮影し、種類ごとに記号を付して、配列の図面の作成  
刻印の写真

## 参考文献

- 石川繁治2001「三州瓦の歩み」『日本の瓦・三州の瓦』以文社
- 市川創2019『近世上方の屋瓦に関する基礎的研究』
- 井上要1927『日本瓦業総覧』日本瓦業総覧刊行会
- 小比賀信茂2016『重要文化財 小比賀家住宅主屋ほか四棟保存修理工事報告書』
- 香川県1957『香川県の粘土製品工業』
- 香川県教育委員会1981『香川県の近世社寺建築』
- 香川県教育委員会2000『空港跡地遺跡Ⅳ』
- 香川県教育委員会2003『高松城跡（西の丸町地区）』Ⅱ.
- 香川県教育委員会2003『空港跡地遺跡』Ⅵ
- 香川県教育委員会2004『空港跡地遺跡』Ⅶ
- 香川県教育委員会2004『空港跡地遺跡』Ⅷ
- 香川県教育委員会2005『香川県の近代化遺産』
- 香川県教育委員会2010『香川県の近代和風建築』
- 香川県商工水産課1939『香川県商工要覧』
- 国分寺町2005『さぬき国分寺町誌』
- 北山學2015『淡路瓦の歴史』江戸時代を中心に
- 駒井綱之助1963『粘土瓦読本』三州瓦のあゆみ
- 駒井綱之助『かわら日本史』三州瓦のあゆみ
- 佐藤竜馬1994「18～19世紀の土器・瓦」『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成5年度 香川県教育委員会
- 佐藤竜馬2000「第5章まとめ 第5節 近代遺物からみた林村、空港跡地遺跡」Ⅳ 香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬2002「傳右衛門と辰蔵、そして玉屋・水屋－高松城下と近郊の瓦生産－」『四国徳島城下町通信』第9号
- 佐藤竜馬2003「第4節出土瓦の研究」『高松城跡（西の丸町地区）』Ⅱ 香川県教育委員会ほか
- 重要文化財小比賀家住宅修理委員会1987『重要文化財 小比賀家住宅修理工事報告書』
- 小豆島農村歌舞伎調査委員会2019『国選択無形民俗文化財調査報告書 小豆島農村歌舞伎』《資料編》
- 須藤定久2000「兵庫県淡路島の瓦と粘土資源」『地質ニュース』556号
- 高松市教育委員会2017『高松城跡（寿町一丁目地区）』
- 高松市教育委員会2019『林宗高遺跡』
- 高松市立林小学校創立百周年記念実行委員会1992『高松市立林小学校創立百周年記念誌』
- 田中稔『粘土瓦ハンドブック』
- 檀紙村誌研究会1986『檀紙村誌』
- 坪井利弘1977『図鑑瓦屋根』理工学社
- 中村隆1986「「だるま窯」の研究－歴史といぶし瓦の焼成工程－」『日本の産業遺産－産業考古学研究－』玉川大学出版部
- 乗岡実1996「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世社寺建築』岡山市教育委員会
- 乗岡実2017『石垣と瓦から読み解く松江城』松江市ふるさと文庫19 松江市歴史まちづくり部史料編纂課
- 乗岡実2021「岡山城下の瓦作り」『就実大学史学論集』第35号 就実大学総合歴史学科
- 林村史編集委員会1958『林村史』
- 原田多加司2004『屋根の日本史』
- 藤原学2001『達磨窯の研究』学生社
- 藤田元春1967『日本民家史』刀江書院
- 藤森照信1993a『日本の近代建築（上）』－幕末・明治篇－ 岩波書店
- 藤森照信1993b『日本の近代建築（下）』－大正・昭和篇－ 岩波書店
- 文化庁文化財部2016「新登録の文化財」『月刊文化財』3月号（630号）
- 埋蔵文化財研究会2017『幕藩体制下の瓦』
- 間壁忠彦2001「倉敷の屋根瓦とその産地」『倉敷の歴史』第11号
- 間壁忠彦2002「江戸後期と明治の民家屋根瓦」『倉敷の歴史』第12号
- 三谷郷土史編集委員会1988『三谷郷土史』
- 山崎吉弘2019「近代・現代の瓦とその多様化」『考古学ジャーナル』726
- 渡邊誠2017「四国における近世瓦の生産と流通－高松藩における御用瓦師の成立－」『幕藩体制下の瓦』埋蔵文化財研究会
- 渡邊誠2019「瓦が語る建築の歴史の一コマ」『日本建築の自画像』香川県立ミュージアム
- 渡邊誠2021「近代瓦生産の基礎的研究－高松地域を事例として－」『持続する志』岩永先生退職記念事業会
- 渡邊誠2022「肥土山の舞台の瓦」『重要有形民俗文化財 肥土山の舞台修理工事報告書』



# ①外観調査 ～漆原邸～

2022. 04. 20 (渡邊誠 作成)

## 高松市三谷町漆原邸の瓦について

### 1) 前提

- ・ 悉皆調査を行ったわけではないため、建物ごとの組成（組み合わせと数量）は完全に把握できていない（見落としした瓦もある）。
- ・ 写真のみでの観察に基づくもので、瓦自体の詳細な観察はできていない。
- ・ 瓦の年代＝現存する建物建築年代ではなく、漆原邸の建物の歴史（増改築や葺き替え）を示す。

### 2) 現地で確認できたこと

- ・ いずれの建物も軒平瓦のいずれも多様な文様の瓦が混在していること、県内では珍しく家紋瓦が多く使用されており、軒瓦の組み合わせが分かりにくく、建物間での瓦の移動も想定される。
- ・ 主屋は「しきだい」の東西など場所によって使用している文様が異なるが、セット関係に一定のパターンがある。「しきだい」の東側は凹型の軒平瓦（後述のF類）を使用し、西側は文様をもつ瓦（A10類）を使用しており、東側が新しい葺き替えと想定される。
- ・ 19世紀前半～中頃を示す軒平瓦（半裁花菱文）は長屋門、主屋に点在している。
- ・ 19世紀前半～中頃の瓦職人である辰蔵・傳右衛門（下記、刻印一覧参照）の刻印が残る平瓦が土塀に数多く使用されている。
- ・ 軒丸瓦は、長屋門の東側に附属する屋根に巴文のものがあるほかは、基本的には家紋瓦である。
- ・ 主屋の瓦は非常に焼成がよい感じを受ける（焼直し？）
- ・ 古手の瓦（数量も少ない）は見えにくい場所で使用されている。

### 3) 瓦から確認できたこと

#### あ) 軒丸瓦

巴文系と家紋瓦に大別でき、巴文系は極めて少ない。

#### ・ 巴文系

巴文や珠文の表現、外縁が細く、直径に占める内区の幅が大きい点などから、18世紀後半に位置づけられると考えられる（巴文系①）。ただし、巴の表現がシャープな（稜線が鋭い）ものは19世紀以降の可能性もある（巴文系②）。

#### ・ 家紋瓦

「並び矢」を用いたもの(家紋A類)と、三谷町通谷の漆原家の家紋?である「中陰松皮菱に並び矢」を用いた(家紋B類)ものの2種類がある。矢の細部の表現(矢の軸や羽の表現)でA類が12種類以上、B類が3種類以上ある。(未確認のものもある)

A①・②は外縁部が細く、風化の程度などから、19世紀以前の可能性があるが、組み合わせなどから考えると、19世紀前半の可能性もある。ここの詳細の時期は不明であるが、A①～⑧は筒部凸面に大型の釘穴が施されており、⑨～12は小型の釘穴であることから、後者は大正時代以降(明治期末の可能性もあり)のものと考えられる。⑧は文様が他のものと異なる表現であることから、位置づけが難しい。

個別の細かな年代は不明な部分があるが、(A①・②・⑧) → (A③～⑦) → (A⑨～12)の順序が想定される。

#### い) 軒平瓦・軒棧瓦

中心飾りから、半裁花菱文(A類)、宝珠文(B類)、蔦葉文(C類)、菊花文(D類)、菱形文(E類)、無文(F・G類)、不明の8種類に分類できる。

##### ・半裁花菱文(A類)

檀紙・御厩村系(A①～⑦)とそれ以外に分類でき、前者は19世紀前半～中頃のものが主体で、江戸時代に葺かれたと考えられる。

A⑧・⑨は中心飾りの左右に展開する唐草が二重線で表現されており、こうした特徴は18世紀中頃から後半にかけての特徴であること、数も少ないことから18世紀後半の可能性はある。ただし、高松城跡周辺では見られないものである。

A12～14も江戸時代のものと考えられる。

A10・11・15・16は明治期以降の地域に生産が広がったものと考えられる。

##### ・宝珠文(B類)

A類同様に、B①は18世紀後半の可能性があり、高松城跡で類似したものが出土している。②③も江戸時代のものと考えられ、同様に18世紀後半の可能性はある。

##### ・蔦葉文(C類)

丸亀藩系の瓦である。詳細は不明。

##### ・菊花文(D類)

①②は文様表現(唐草の表現)から江戸時代のものと考えられるが、③は近代以降のものと考えられる。

##### ・菱形文(E類)

他事例から、林村の善右衛門が生産した瓦と考えられ、登録文化財の真鍋家住宅、登録有形民俗文化財の讃岐六条の水車、空港跡地遺跡などで確認されている。

##### ・無文(F・G類)

F類は、明治期末以降のもので、概ね大正時代のものである。G類は昭和初期以降と考えられる。増築などがなされた箇所でもとまって葺かれている点からも確認できる。刻印

が多く施されている。

う) 刻印

- ・多様な刻印が確認できる。
- ・檀紙・御厩村系と林村周辺の刻印が目立つ。
- ・これまで確認していなかった瓦の刻印もある。

表 刻印瓦一覧

刻印	製作者／生産者	時期（活躍する時期）	備考
○に辰	檀紙村 辰蔵	19 世紀前半	御用瓦師
○に傳	御厩村 傳右衛門	19 世紀前半 ～20 世紀前半（戦前）	御用瓦師
且紙富	檀紙村 富次	明治以降～？	
西香川郡檀紙村富次	檀紙村 富次	明治以降～？	
林善右衛門	林村 善右衛門	明治以降（明治 23 年～）？	
林善	林村 善右衛門	明治以降（明治 23 年～）？	
林村 河野彦吉	林村 河野彦吉	明治以降（明治 23 年～）？	
上林 岡崎	上林村 岡崎佐太郎	大正時代？	
出作 ■	出作村 ●●	-	
■久吉	●●村 久吉	-	
■西■吉	-	-	
妙見	-	-	

■：判読できない文字。上記以外の瓦にも刻印を確認したが、判読ができなかったものは表に記載していない。

え) 瓦の組み合わせ（現状での想定（イメージ先行）も含む）

19 世紀以前

軒丸瓦 巴文系 と 軒平瓦 A⑧⑨、B、D類？

19 世紀前半

軒丸瓦 家紋瓦A①② と 軒平瓦 A①（～⑤）類

明治以降

軒丸瓦 家紋瓦A③～⑦ と 軒平瓦 A10 類

軒丸瓦 家紋瓦A⑩ と 軒平瓦 E①類

軒丸瓦 家紋瓦A12 と 軒平瓦 E②類

大正（明治末）以降

軒丸瓦 家紋瓦A⑨・B③ と 軒平瓦 F①類

軒丸瓦 家紋瓦B② と 軒平瓦 A16 類、F③類（同じ刻印）

#### 4) 漆原邸に残る瓦から分かること

- ・ 寺社を除き、県内では珍しい家紋瓦を踏襲して使用していること。
- ・ 軒瓦に 18 世紀後半と考えられる一定量存在し、半裁花菱文の軒平瓦及び刻印から、19 世紀前半の瓦も一定量存在する。これらのことから、18 世紀後半以降に建物があつたと考えられる。19 世紀前半の瓦は建物年代（香川県教委 1971）と合致する。
- ・ 明治以降～大正にかけても、瓦の葺き替えが行われている。
- ・ 建物が象徴するように、地域の有力者（大庄屋）であつたと考えられるが、19 世紀前半には藩内の札所寺院や主要な寺社には、藩の御用瓦師から瓦が供給されており、漆原邸も同様な瓦が使用されていることから、藩における漆原家の格付けや高松平野南部における漆原家の役割を想像することができる。
- ・ 明治以降の瓦の葺き替えには、上記の御厩・檀紙村からの供給に加え、林村や上林村の瓦が使用されており、近代以降、瓦生産と供給のあり方が変化したことを確認できる。
- ・ 近隣の真鍋家住宅（登録文化財）、讃岐六条の水車（高原水車：登録有形民俗文化財）、空港跡地遺跡で出土している瓦と同様であり、林村周辺での瓦の生産と供給範囲等を考える上で重要な資料である。

#### 参考文献

香川県教育委員会 1971『香川県の民家』

渡邊誠 2017「四国における近世瓦の生産と流通—高松藩における御用瓦師の成立—」『幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—埋蔵文化財研究会』

渡邊誠 2021「近代瓦生産の基礎的研究—高松地域を事例として—」『継続する志』岩永省三先生退職記念論文集 中国書店

渡邊誠 2021「「現役瓦」の考古学的研究～近世末から近代における高松地域周辺の瓦生産について～」『考古学研究会 10 月例会発表資料』



巴文系①(18世紀後半か?)



巴文系②(19世紀以降か?)

軒丸瓦①(巴瓦)

A類 「並び矢」



A①



A②



A③



A④



A⑤



A⑥



A⑦



A⑧



A⑨ 釘穴 小



A⑩ 釘穴 小



A11 刻印「出作 ■」あり  
釘穴 小



A12 釘穴 小

B類 中陰松皮菱に並び矢



B① 釘穴 小  
軒丸瓦②(家紋瓦)



B② 刻印「久吉」あり  
釘穴 小



B③ 釘穴 小

D類 菊花文系



D①



D②



D③

E類 菱形文系

他事例から「林村 善右衛門」の生産瓦



E①

登録有形文化財の真錦家住宅と類似



E②



E③

B類 宝珠文系



B①

C類 蔦葉文系?



B②

系統不明



B③



A類 半截花菱文系（檀紙・御厩系）



A①



A②



A③

軒平瓦①（棧瓦・土塀瓦含む）



A④



A⑤



A⑥



A⑦「西香川郡檀紙村富次」の刻印瓦

半截花菱文系（そのほかの生産地？）



A⑧



A⑨



A10



A11



A12



A13



A14



A15



A16

刻印「久吉」あり

軒平瓦②（棧瓦・土塀瓦含む）

**F類 無文系（凹型）**



F①



F④

F② 刻印「■西■吉」あり（■は判読できない）



F③ 刻印「久吉」あり

**G類 無文系（石持型）**



軒平瓦⑤(棧瓦・土塀瓦含む)

刻印「上林 岡崎 (佐太郎)」あり



漆原邸の瓦の刻印

重要有形民俗文化財「中山の舞台」所蔵瓦について

1 中山の舞台に保管されていた瓦の前提

- ・ 葺かれていた状況は不明
- ・ 過去の写真によれば、前面は巴、背面は蛇の目。
- ・ 建物の修理は不明（今回の修理前の瓦は平成3年度に葺替え）
- ・ 現存する瓦の示すものは過去に葺かれていた可能性がある。
- ・ 文政元年・文化年間の落書あり。→建物は19世紀前葉まで遡る

2 瓦の特徴

①軒丸瓦（35点）

・ A 巴文（8点）

すべて異なる文様。A1・A4・A7は丸瓦の長さが長いので、使用箇所が異なる？

釘穴 3種類：丸瓦部に2個（a 穴と穴の距離が異なる）

玉縁部に1個（b1）と2個（b2）がある

・ B 蛇の目（27点）

蛇の目の大きさは大・小の2種類

釘穴 2種類（玉縁部に1個（b1）と2個（b2）の場合。）

→年代のイメージ

19世紀～：A4・A7（釘穴 a、釘穴間の距離短い）

幕末～明治前半：A2・5・6（釘穴 a、釘穴間の距離長い）

明治後半：A1・8 / B2a・2b・2c（蛇の目の利用と釘穴2個（b2））

大 正：A3 / B1a・b・3（蛇の目の小型化と釘穴1個（b1））

②軒平瓦（35点）

・ A 橘文（大坂系）（16点）

文様の種類で7種類に細分

A7：18世紀後半～

A1～A3：19世紀～

A4：19世紀中葉～

A5・A6：明治以降？

・ B 宝珠文（1点）

19世紀？

・ C 巴文（岡山系）（6点）

2種類に細分

18世紀後半～

- ・D 菊花文（9点）

2種類に細分（D2は凸面に斜格子叩き状圧痕）

大正？

- ・E 凹型文（2点）：凸面に斜格子叩き状圧痕

大正

- ・F 三葉文（1点）

17世紀？

### 3 組み合わせと年代

上記を整理すると以下のような変遷が想定される。

年代	軒丸瓦	軒平瓦	位置づけ
17世紀？		F	不明
18世紀後半～		A7、C	不明
19世紀～明治前半	A4・A7、A2・5・6 A1・8、B2a・2b・2c？	A1～A3、A4 A5・6？	当初 改築？
明治後半～大正	A1・8、B2a・2b・2c？ A3、B1a・b・3	A5・6？ B？、D1・2、E	修繕
平成3年	B4		



A1



A2



A3



A4



A5



A6



A7



A8



B1a



B1b



B2a



B2b



B2c



B3

中山の舞台



橘

A1



橘

A2



橘

A3



橘

A4



橘

A5



橘

A6



橘

A7

中山の舞台



宝珠

B



巴

C1



巴

C2



菊花

D1



菊花

D2



蛇の目 (凹型)

E



三葉

F

中山の舞台

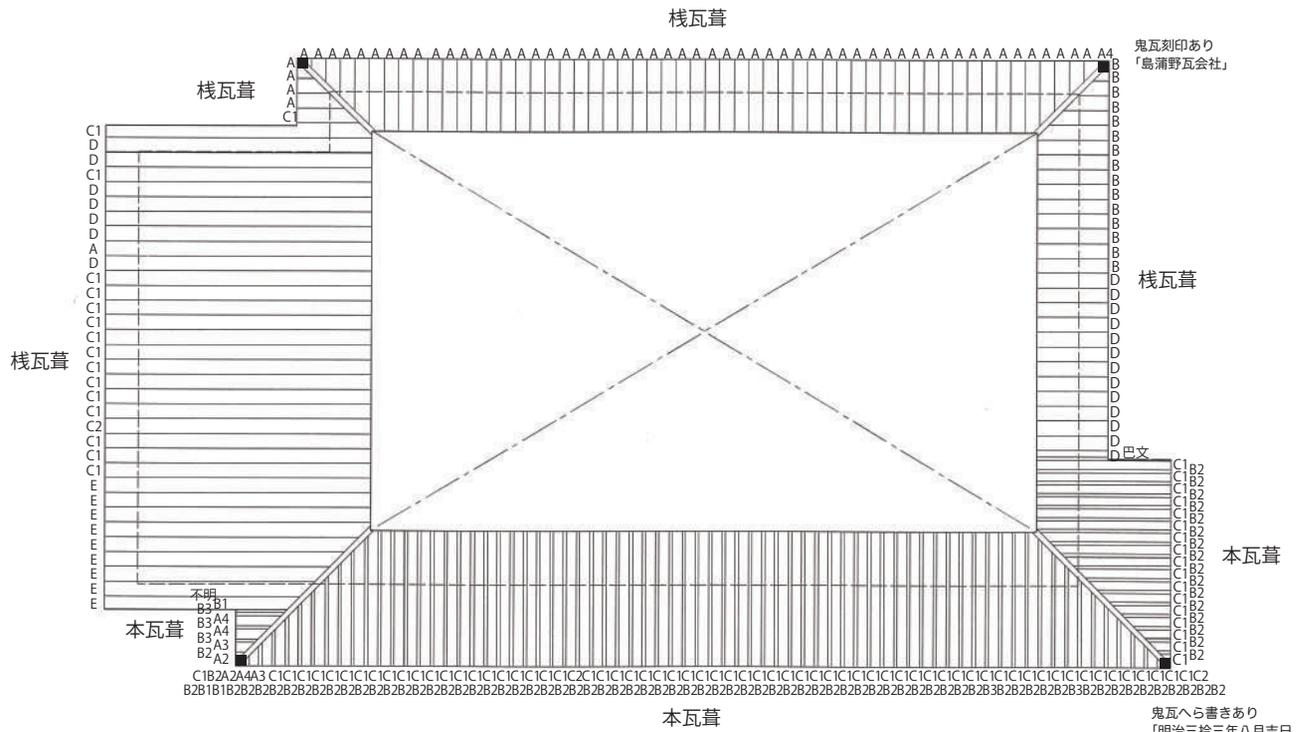
軒丸瓦一覧表

形式	点数	珠文数	珠文の 大きさ	全長	瓦当径		丸瓦部		重さ	タイプ	釘穴		刻印	丸瓦凹面
					最大幅	内区	全長	幅			厚み	距離		
4 A4	1	16	1.1	34.0	14.5	-	32.0	13.0	1.80	a	-	7.0	-	布目細かい
7 A7	1	12	1.1	36.5	14.4	-	34.5	12.6	1.70	a	-	8.0	-	布目細かい
2 A2	1	11	1.2	29.5	13.0	-	27.9	13.0	1.50	a	-	12.0	-	布目粗い
5 A5	1	13	1.1	29.0	13.3	-	27.4	12.5	2.00	a	-	12.5	-	布目粗い
6 A6	1	11	1.2	29.5	13.0	-	27.8	13.0	1.60	a	-	12.3	-	布目粗い
8 A8	1	11	1.1	29.2	13.0	-	27.5	13.1	1.80	b2	釘穴2	-	-	布目粗い・摩叩き
1 A1	1	-	1.4	34.0	13.0	-	32.0	14.0	1.70	-	釘穴2	-	-	布目粗い・摩叩き
11 B2a	1	-	-	-	13.5	5.8	-	13.0	1.40	-	釘穴2	-	-	布目粗い・摩叩き
12 B2b	4	-	-	29.5	13.5	6.5	27.9	13.5	1.80	b2	釘穴2	-	-	布目粗い・摩叩き
13 B2c	8	-	-	29.5	13.5	6.3	27.9	13.0	1.70	b2	釘穴2	-	-	布目粗い・摩叩き
3 A3	1	13	1.2	30.0	13.5	-	28.3	12.8	1.70	b1	釘穴1	-	-	平滑
9 B1a	1	-	-	29.0	13.5	7.0	27.3	13.0	1.90	b1	釘穴1	-	-	平滑
10 B1b	9	-	-	32.0	13.5	6.0	30.3	13.0	1.60	b1	釘穴1	-	-	平滑
14 B3	1	-	-	30.0	13.6	4.6	28.0	12.7	1.85	b1	釘穴1	-	明印	平滑
15 B4	1	-	1.1	37.5	16.0	-	35.3	15.2	2.40	c	-	-	-	平滑

軒平瓦一覧表

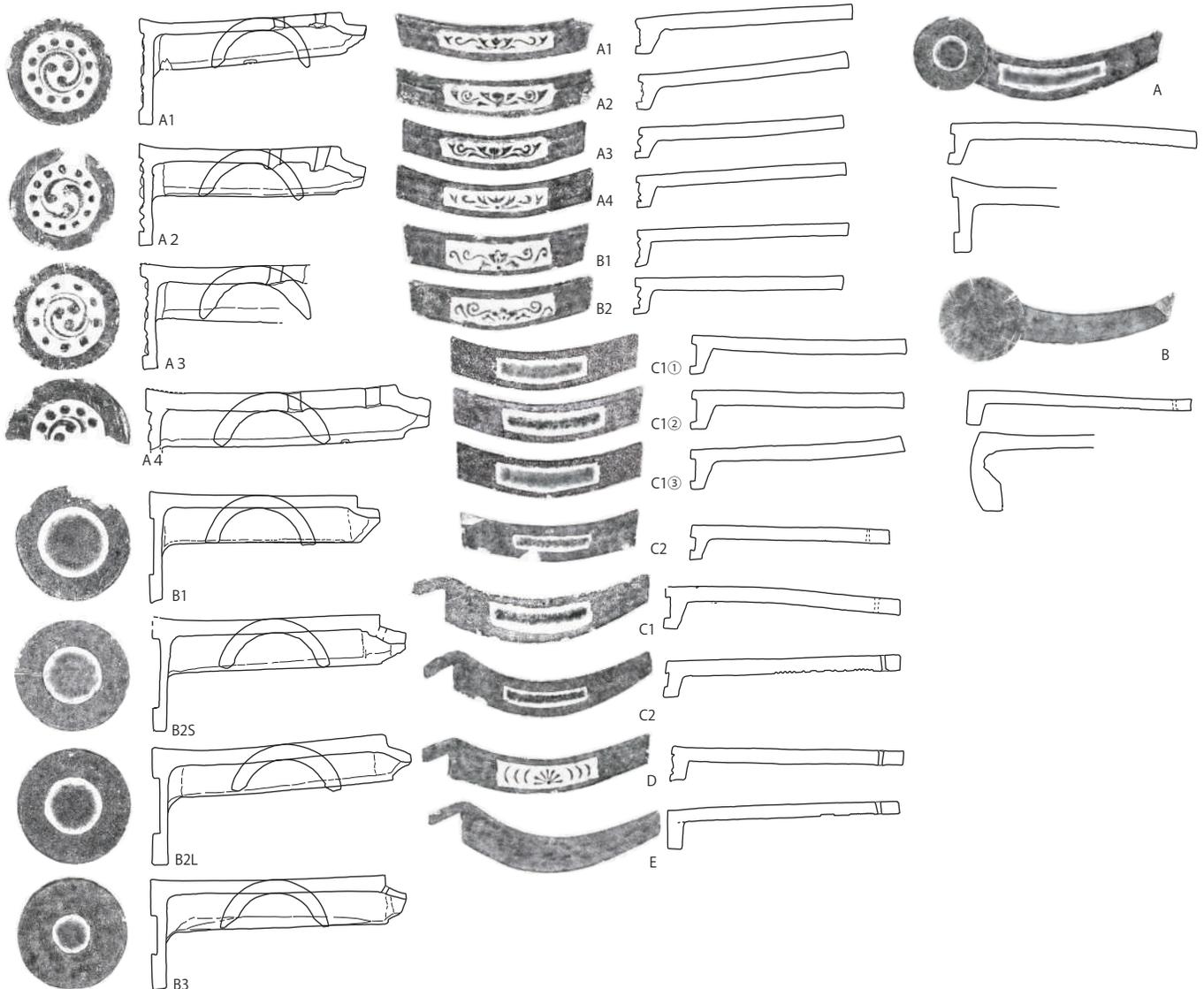
形式	点数	全長	内区		内区 幅中央	内区 幅左端	内区 幅右端	広端部幅	狭端部幅	瓦当幅	厚み	重さ	釘穴	凸面	
			上部長	下部長											
14 F	1	-	12.2	11.5	2.3	2.3	2.3	24.2	-	3.6	1.7	(1.70)	-	ナデ	三葉文
7 A7	1	26.3	13.9	13.9	2.2	2.0	2.0	24.0	22.9	4.1	1.8	2.00	-	ナデ	橘文 (大坂系)
9 C1	5	27.0	12.0	12.0	2.2	2.2	2.2	25.0	24.0	3.5	1.8	2.05	-	ナデ	巴文 (岡山系)
10 C2	1	25.3	11.0	11.0	1.5	1.8	1.7	23.0	22.1	3.1	1.8	1.70	-	ナデ	巴文 (岡山系)
1 A1	1	26.6	14.0	13.8	1.8	2.0	2.0	24.1	23.3	3.9	1.4	1.75	-	ナデ	橘文 (大坂系)
2 A2	1	25.2	13.0	12.7	2.0	2.0	2.1	23.3	22.7	4.1	1.8	1.75	-	ナデ	橘文 (大坂系)
3 A3	5	26.7	14.0	14.0	1.8	2.0	2.0	24.6	23.7	3.9	1.7	1.90	-	ナデ	橘文 (大坂系)
4 A4	2	25.5	12.2	12.2	2.2	2.3	2.3	23.8	22.6	3.7	1.6	1.85	-	ナデ	橘文 (大坂系)
5 A5	3	26.6	12.5	12.3	2.2	2.2	2.2	24.2	24.0	4.0	1.7	1.90	-	ナデ	橘文 (大坂系)
6 A6	3	25.8	13.0	13.0	2.5	2.4	2.4	23.5	21.2	3.6	1.6	1.80	-	ナデ	橘文 (大坂系)
8 B	1	26.0	12.2	12.2	2.4	2.5	2.4	24.2	23.2	4.2	1.4	1.80	-	ナデ	宝珠文
13 E	2	26.0	11.0	10.5	1.7	1.6	1.8	24.5	23.3	4.1	1.6	1.85	-	斜格子	凹型文
11 D1	1	24.0	9.0	9.0	2.0	2.1	2.1	22.8	21.0	3.7	1.5	(1.30)	-	ナデ	菊花文
12 D2	8	24.7	12.3	12.5	2.3	2.3	2.3	23.0	21.8	4.1	1.6	1.75	-	斜格子	菊花文

### ③解体修理を行う際の瓦の調査 ～肥土山の舞台～



#### 屋根伏図（瓦葺）

凡例		軒瓦	A: 凹型
軒丸瓦 (蛇の目)	B1: 特大 B2: 大 B3: 小	B: 万十瓦	B: 万十瓦
軒平瓦	A: 大坂系 (橘) A1, A2, A3	C: 凹型 C1: 太い C2: 細い (鎌形)	C: 凹型 C1: 太い C2: 細い (鎌形)
	B: 高松藩系 (半裁花菱) B1, B2	D: 菊文系 (鎌形)	D: 菊文系 (鎌形)
	C: 凹型 C1: 凹み部が太い C2: 凹み部が細い	E: 石持型 (鎌形)	E: 石持型 (鎌形)



■ 軒丸瓦 ■



A1 類



A2 類



A3 類



A4 類



B1 類



B2S 類



B2L 類



B3 類

■ 軒平瓦 ■



A1 類



A2 類



A3 類



A4 類



B1 類



B2 類



C1①類



C1②類

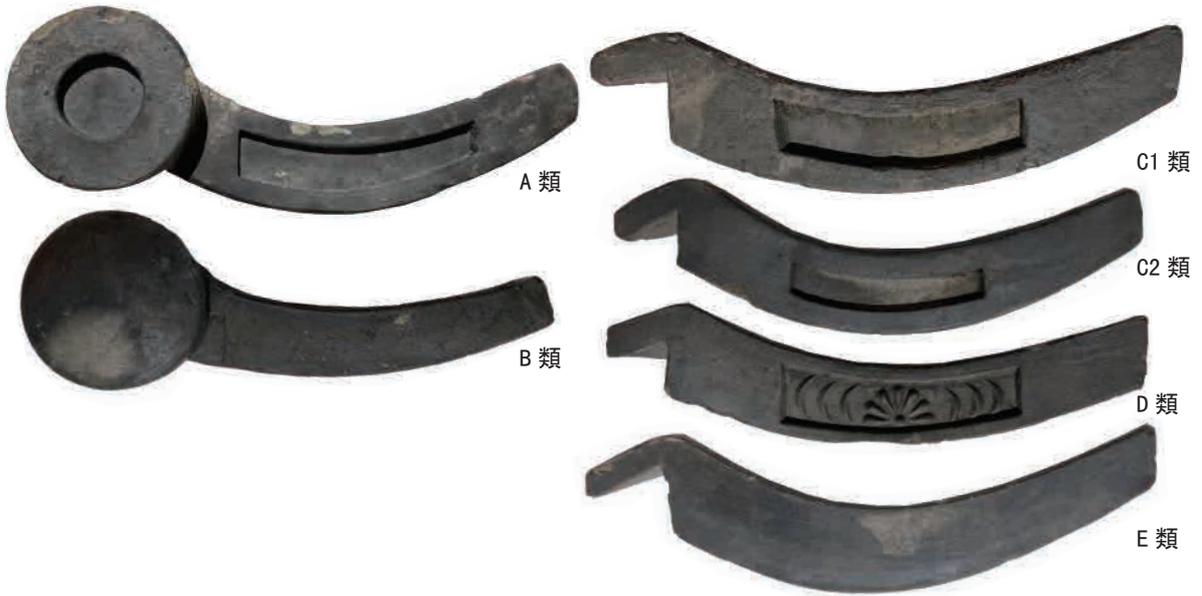


C1③類



C2 類

■ 軒棧瓦 ■



■ 棟札 ■



手置帆負命  
彦狭知命  
八意思兼命  
產土大御神  
屋船久々能知命  
屋船豐麦姬命

紀元貳千五百六拾歲

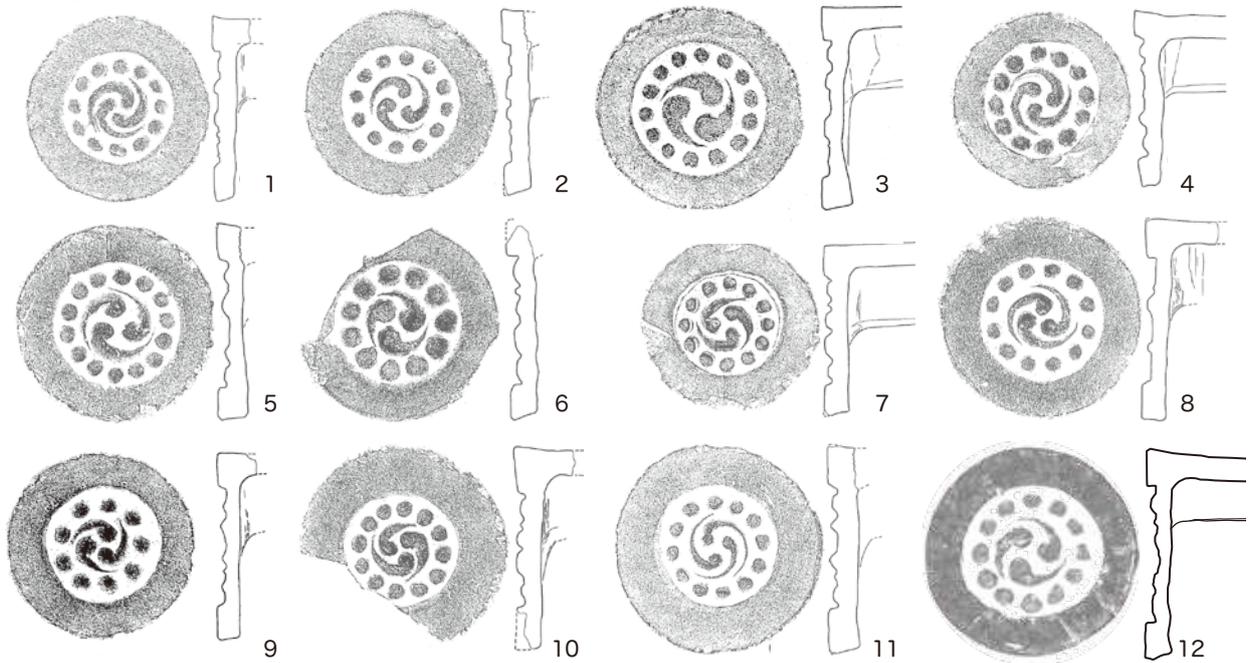
上棟式

舞台奉大放生氏子中安全祈願

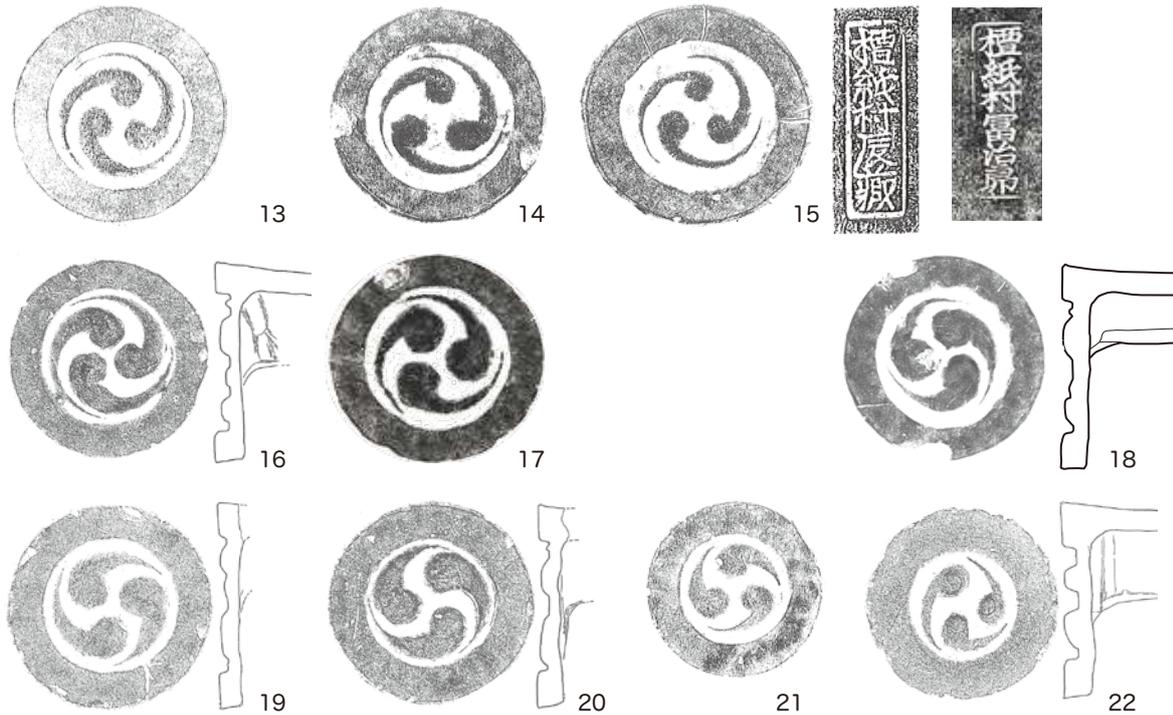
明治三拾三年十月拾四日

# 参 考 资 料

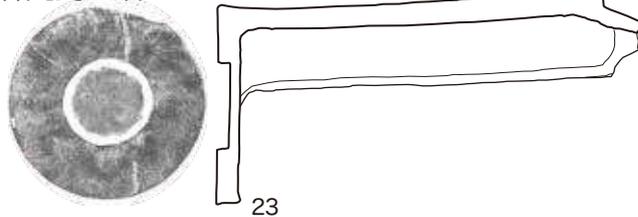
軒丸瓦 1類



軒丸瓦 2類



軒丸瓦 3類



軒丸瓦 4・5類



第1図 軒丸瓦の分類 (S=1/5)

1~11、17、19~20、22:高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ(香川県教育委員会2003)、12:個人住宅資料(筆者実測)、13:西香寺参道北側土塀(佐藤2002) 14~15:志度寺仁王門脇土塀(佐藤2002)、21:薬師寺門前地藏堂(佐藤2002)、16、23:個人住宅資料(筆者実測)、17:法華寺資料(筆者実測)、24:空港跡地遺跡Ⅷ(香川県教育委員会2004)

## 本講義の前提

### ①資料～高松・東讃・小豆地域～

- あ) 発掘調査資料（高松城跡周辺資料、林宗高遺跡出土資料、空港跡地遺跡資料）
- い) 年代の分かる建造物（寺院・民家など）：
  - ・ 指定文化財や登録文化財
  - ・ 近世社寺建築や近代和風建築、近代化遺産の調査で年代が明らかになっている建物
  - ・ 巷に残る古い瓦を葺いている建物（組み合わせや分布域の検討のため）

### ②年代：1800～1945年

### ③瓦の種類：軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦

\*呼称については、考古学で使用する軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦を使用するが、坪井利弘氏の呼称（1977）についても併記する。

### ④近世末から近代にかけての瓦生産の変遷とその背景

#### 瓦の製作の契機

江戸時代：築城期、高松城の建造物の修理や建替え、東の丸造宮（良櫓等の作事）、城下町の整備、火災（高松大火）、台風や地震

近代以降：社会の変化による新たな建物の建築（公共施設の整備、瓦屋根の普及）  
近代和風建築など新たな建築文化の広がり

#### 生産技術の変化

土練機の開発（石川2001）

石原熊次郎による石炭焚改良窯の開発（駒井1972、中村1986、藤原2001）など

瓦の大量生産と製作の機械化

## ①軒丸瓦

### 軒丸瓦 1 類

巴の周辺に配置される珠文が定型化した円形を呈し、非常に立体的で整った形状になり、瓦当全体に占める割合も大きくなる。巴（巴頭や巴尾）の形状も立体的で形が整っていく。その表現や珠文の数などにはヴァリエーションがあり、いくつかの系譜があると考えられるが更なる細分は今後の課題とする。変化の方向性はあまり明確ではなく、巴が丸く表現されるものから鋭い稜線が生じるものへと変化し、内区における殊文や巴文の占める割合が高くなり、余白が減少する傾向がある。定型化した巴のものは、巴の表面を平坦に整形するものもある。

### 軒丸瓦 2 類

珠文を除いた巴文のみの構成となるものである。1 類同様に、巴（巴頭や巴尾）の形状や巴頭間の間隔にヴァリエーションがあり、いくつかの系譜があると考えられるが更なる細分は今後の課題とする。尾が長いものは、巴頭の形状がやや不整形である。巴頭の形状が不整形で巴尾の長いものから巴頭の形状が整った円形で巴尾が短いものへと変化すると考えられる。なお、軒丸瓦 1・2 類は丸瓦部の玉縁側に、縦方向に 2 箇所、直径 1.5cm 程度の穿孔を行う。玉縁との接続部に、横方向に 2 箇所、鉄釘が通る程度の小さな穿孔を行い、瓦を葺く際に銅線などによる固定を行なったものもある。

### 軒丸瓦 3 類

外縁に囲まれた中央部に全く文様を施さない、いわゆる蛇の目型のもの（蛇の目軒巴）である。この中央部の凹みの大きさはヴァリエーションがあり、巴文を省略しただけのものから小型化し、凹み自体が文様化するものへと変化すると考えられる。また、凹みの中央部分は平坦になるものが一般的であるが、凸型になるものもある。玉縁との接続部に、横方向に 2 箇所、鉄釘が通る程度の小さな穿孔を行い、瓦を葺く際に銅線などによる固定に変化する。

### 軒丸瓦 4 類

3 類の凹みがなくなり、平坦になるもの（石持軒巴（丸）瓦）である。

#### 軒丸瓦 5 類

4 類の平坦面が凸型面になるもの（万十軒巴（丸）瓦）である。

### ②軒平瓦（半裁花菱文等）

#### 軒平瓦 1 類

18世紀中頃以降、中心飾りを半裁花菱文とする軒平瓦は、高松藩の領域に主に分布し、藩の主体的な文様となる（佐藤2003）。その形状や周辺に展開する唐草によって複数の系統が存在する。特に、半裁花菱文の中心の花の形状及びその中心部の軸線表現の有無と双方に展開する唐草の形状やy字状の唐草などの文様構成によって檀紙・御厩系と新瓦町系（佐藤2002）に分類できる。半裁花菱文軒平瓦は出現以降、左右に展開する唐草の表現が二重線、単線、雲形という順序で変化する（佐藤2002、渡邊2017）。特に、雲形をここでは平瓦1類とする。その中心飾りの形状と左右に展開する唐草の形状の組み合わせによって複数の系統があると考えられる。唐草の表現は唐草上部が弱く肥厚するもの（A）から、太く肥厚するもの（B）、さらにデフォルメ化し、瓦当面一杯に太く肥厚した唐草を配置するもの（連続的な唐草（C1）と短く区切れた唐草（デフォルメ化）を配置するもの（C2））がある。唐草の形状からA→B→Cの変化の方向性が想定される。

#### 軒平瓦 2 類

軒丸瓦同様に無文化し、文様が省略された凹型化したものである。

#### 軒平瓦 3 類

凹みがなくなり平坦面化したものである。2類は中央の凹み部が当初は文様を省略した状況を呈するが、次第に形骸化し、上下の幅が狭くなり、さらに左右の長さが短くなり、この凹み自体が文様化してくる。さらに、区画が弧状に表現されるものもある。

### ③軒棧瓦

軒平瓦と同様に、半裁花菱文によって複数の系統があり、少なくとも軒平瓦同様に檀紙・御厩系と新瓦町系がある。18世紀中頃の棧瓦の出現以降、讃岐地域では、左棧瓦（逆棧瓦／左軒瓦）と呼ばれ、向かって右側に棧があるものが一般的である。基本的には棧の先端部が小巴（小型の軒丸状を呈する）のものとなるのが主流で、高松周辺では鎌形のは江戸時代には認められない。

基本的には同時期の軒丸瓦と軒平瓦の文様を共有し、半裁花菱文の変化、さらには無文化（棧瓦部の凹型化（3類+2類：蛇の目軒（棧）瓦）→平坦面化（4類+3類：石持軒（棧）瓦）→凸面化（5類+3類：万十軒（棧）瓦））という変化を辿ると考えられる。瓦の分類は、上記の軒丸瓦と軒平瓦の分類の組み合わせで表現することとする。なお、無文化以降、機械などでの成形が想定される形を縁取った沈線上の圧痕が確認されるものが多くなり、製作技術の変化が想定される。

## 2) 建物における瓦の組み合わせと年代

現状での試案：類例の増加による組み合わせや年代の精度の向上を図り、組み合わせの地域的な特徴や年代的なずれなどについても検討が必要。

19世紀第1四半期以降：軒丸瓦1類と軒平瓦1A類の組み合わせ

19世紀中頃までに軒丸瓦2類との組み合わせが出現。

19世紀後半～：軒丸瓦1類と軒丸瓦2類、軒平瓦1B・1C類

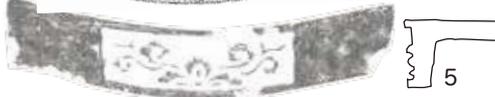
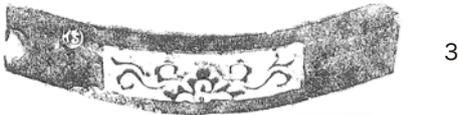
19世紀中頃に1B類、1C類が短期間で出現し、軒平瓦1C類は19世紀中頃～明治35年（1902）頃まで

- 20世紀第1四半期 : 軒丸瓦3類(蛇の目)と軒平瓦2類(凹型)
- 20世紀第2四半期(大正時代末期/昭和時代初期)
  - : 軒丸瓦4・5類(石持・万十)と軒平瓦3類(石持型)
  - : 石持軒棧瓦(4類+3類)は、大正期に出現していた可能性
  - : 万十軒棧瓦(5類+3類)は同時期もしくはそれ以後

檀紙・御厩系



軒平瓦1A類



新瓦町系

軒平瓦1B類



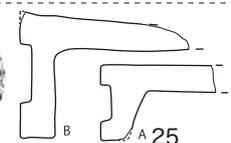
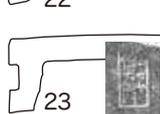
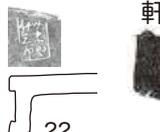
軒平瓦1C類



軒平瓦2類



軒棧瓦 (3類+2類)



軒平瓦3類



軒棧瓦 (4・5類+3類)



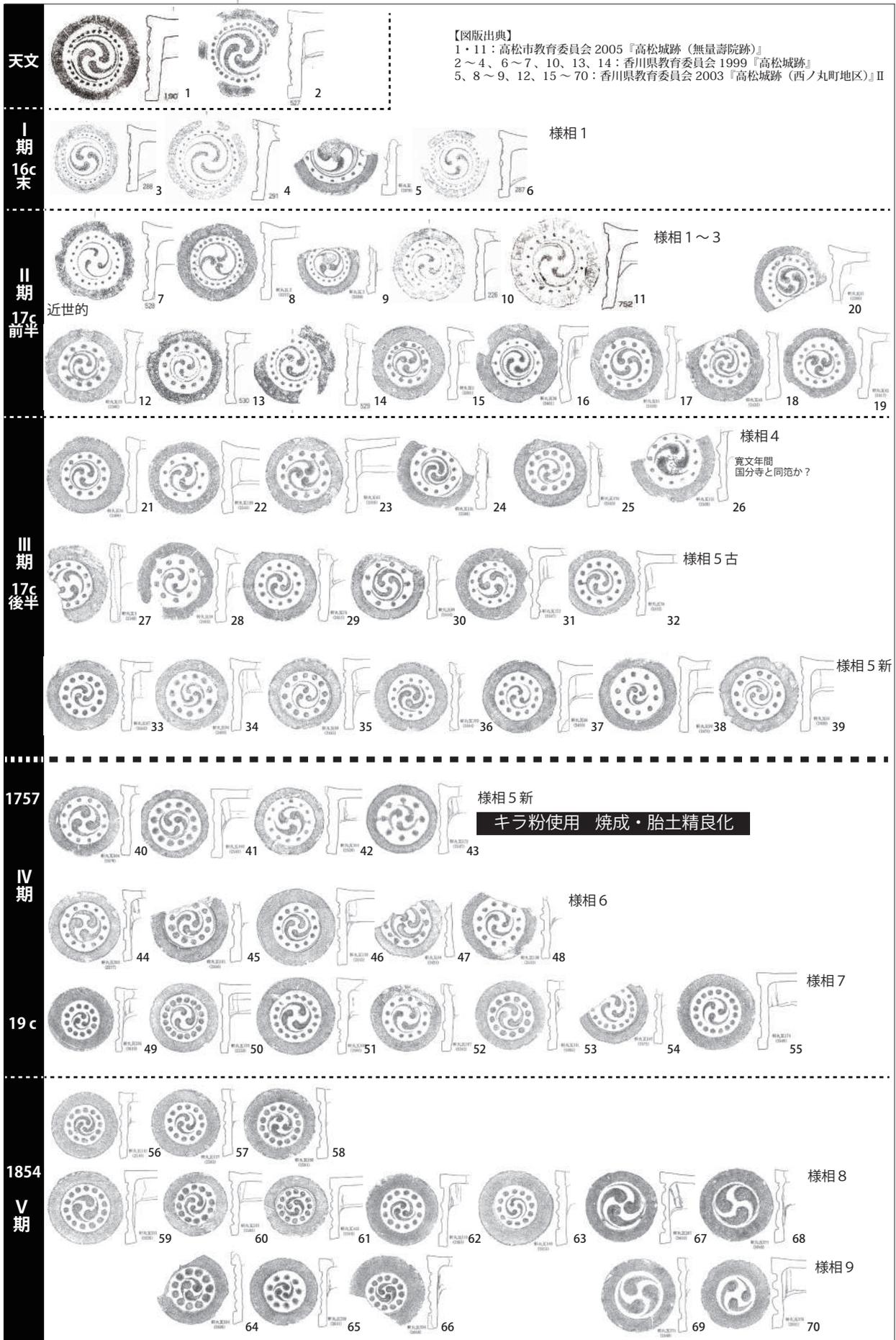
第2図 軒平瓦の分類 (S=1 / 5)

1~2、7、12~14、16、19~21:高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ(香川県教育委員会2003)、3:志度寺仁王門脇土堀(佐藤2002)、4:薬師寺門前地藏堂(佐藤2002)、5、6、8、17、22、23、26:個人住宅資料(筆者実測)、9:空港跡地遺跡Ⅶ(香川県教育委員会2004)、10、11:薬師寺門前地藏堂(佐藤2002)、15:空港跡地遺跡Ⅳ(香川県教育委員会2002)、18、24:(佐藤2002)、28:空港跡地遺跡Ⅷ(香川県教育委員会2004)、25:林宗高遺跡(高松市教育委員会2019)、27:個人住宅資料(筆者実測)、29:法華寺資料(筆者実測)

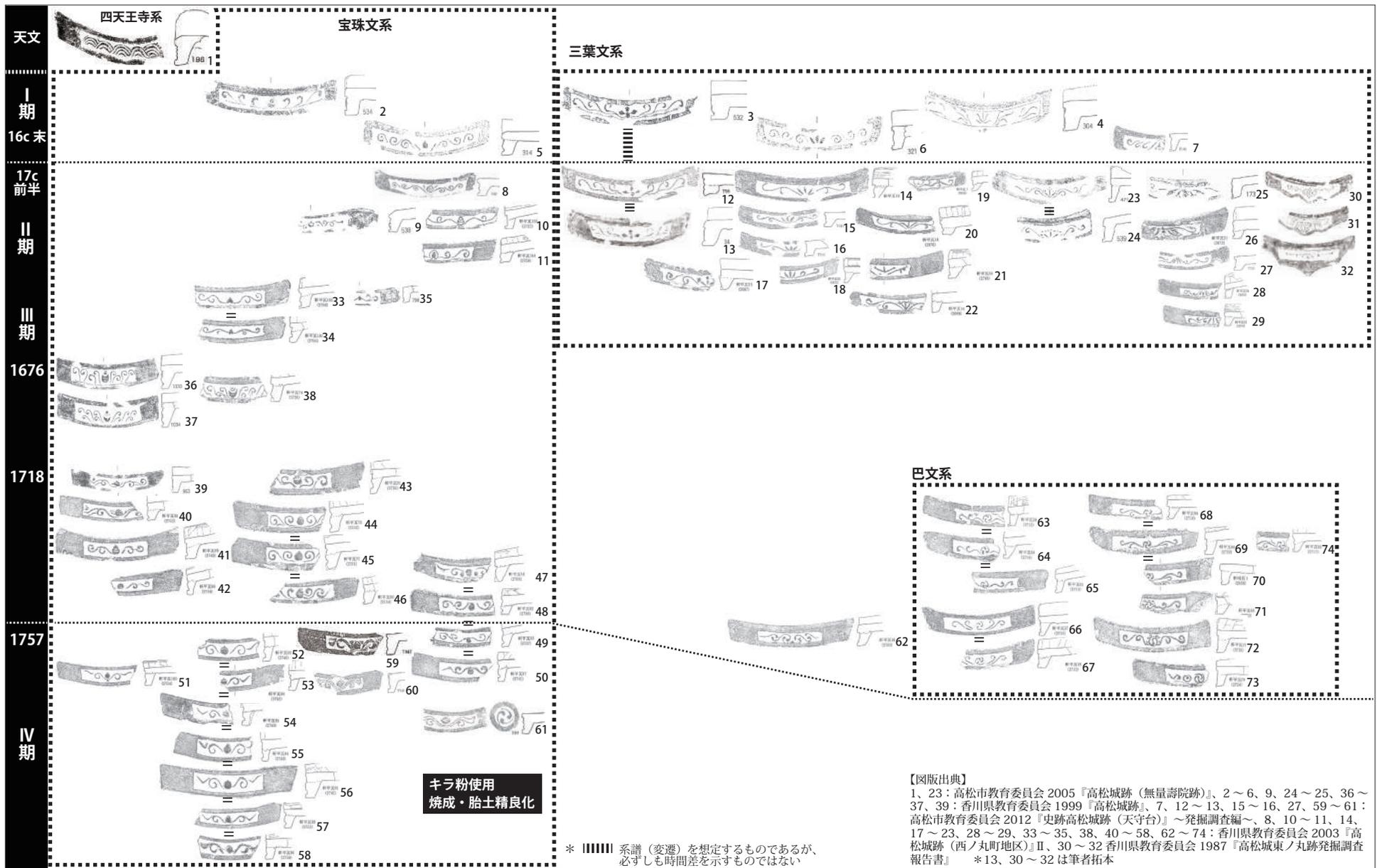
第1表 現役瓦における瓦の組み合わせと年代

建物	所在	軒瓦の組み合わせ		建築年代		備考	
		軒丸瓦	軒平瓦	和暦	西暦		
白峯寺	行者堂	坂出市青海町	1類、菊丸	1B類、1類以外	安永8年	1778	近世社寺建築
船山神社	拝殿	高松市仏生山町	2類	1A類・1C類	文化3年?	1806?	説明板
屋島寺	御成門脇土塀	高松市屋島東町	2類	1B類	文化9年	1812	宗教法人屋島寺2015
法華寺	本堂	高松市国分寺町	1類	1C類	弘化3年~	1846~	国分寺町2005,筆者調査
増井家住宅	書院・主屋	高松市扇町	2類	1B類	江戸末	1850~	登録文化財
薬師寺	門前地藏堂	高松市鬼無町	1・2類	1A・1B類	不明	不明	佐藤2002,葺き替え
志度寺	仁王門脇土塀	さぬき市志度	2類	1A類	不明	不明	佐藤2002
香西寺	参道北側土塀	高松市香西本町	2類	1A類	不明	不明	佐藤2002
旧井上家住宅	主屋	高松市牟礼町	1・2類	1類?	明治初年	1868~	登録文化財
旧井上家住宅	東蔵	高松市牟礼町	2類	1類以外	明治初年	1868~	登録文化財
旧井上家住宅	蔵・米蔵	高松市牟礼町	3類	2類	明治初年	1868~	空港跡地と同文
真鍋家住宅	離れ	高松市林町	2類	1類以外(花文)	明治8年	1875	登録文化財
真鍋家住宅	納屋	高松市林町	2類	1B類 1類以外(菱形)	明治8年	1875	登録文化財
小比賀家住宅	米蔵	高松市御厩町	1・2類	1B類・1C類	明治8年	1875	重要文化財
旧山田家住宅	主屋	高松市牟礼町	3類	2類	明治11年	1878	登録文化財
恵比寿神社	本殿	高松市扇町	2類	1B類	明治初年		近代和風調査報告書 郵便局の瓦は主屋と同じものを使用
重蓮寺	本堂	高松市三谷町	3類	2類	明治19年?	1882?	近代和風調査報告書
真鍋家住宅	長屋門	高松市林町	2・3類	1類以外(菱形) 2類	明治20年~	1887~	登録文化財
宇夫階神社	雑庫	綾歌郡宇多津町	1類	半裁花菱・蔦葉	明治中		近代和風建築調査報告書
福井家(四国村)	石蔵	高松市屋島東町	3類	2類	明治中		近代和風建築調査報告書
美雲院	本堂	高松市一宮町	独自花文	1B類	明治25年	1892	近代和風建築調査報告書
芋坂家住宅	長屋門	綾歌郡綾川町	1類	独自	明治29年	1896	近代和風建築調査報告書
専立寺	本堂	丸亀市綾歌町	2類	蔦葉	明治29年	1896	近代和風建築調査報告書
木村家住宅	主屋	高松市庵治町	3類	2類	明治30年	1897	近代和風建築調査報告書
離宮八幡神社	肥土山の舞台	土庄町	3類	2類	明治33年	1900	重要有形民俗文化財
離宮八幡神社	肥土山の舞台	土庄町	軒棧瓦(3類+2類)		明治33年	1900	重要有形民俗文化財
苗羽小学校	旧田浦分校校舎	小豆島町	軒棧瓦(3類+2類)		明治35年	1902	登録文化財
願成寺	本堂	高松市庵治町	3類	2類	明治36年	1903	近代和風建築調査報告書
真鍋家住宅	土蔵	高松市林町	3類	2類	明治38年	1905	登録文化財
水主神社	旧収蔵庫	東かがわ市水主	軒棧瓦(3類+2類)		明治41年	1908	近代和風建築調査報告書
穴吹家住宅	主屋	高松市川部町	軒棧瓦(2類+2類)		明治43年	1910	近代和風調査報告書
天満屋呉服店	米蔵	高松市仏生山町	4類	3類	明治44年	1905	近代和風建築調査報告書
谷本家住宅	主屋	高松市牟礼町	3類	2類	明治末	1911?	近代和風建築調査報告書
個人住宅	主屋	高松市国分寺町新居	3類	2類	大正初年頃	1912	筆者調査
真鍋家住宅	茶室	高松市林町	軒棧瓦(4類+3類)		大正2~3年	1913~1914	登録文化財
瀬川酒店	店舗	善通寺市上吉田町	3類	2類	大正6年	1917	登録文化財
教信寺	鐘楼	高松市鬼無町	3類	2類	大正7年	1918	近代和風建築調査報告書
郷照寺	厄除大師堂	綾歌郡宇多津町	3類	2類	大正8年	1919	近代和風建築調査報告書
郷照寺	厄除大師堂拝殿	綾歌郡宇多津町	4類	3類	大正8年	1919	近代和風建築調査報告書
西法寺	本堂	高松市太田上町	「西」	2類(滴水型)	大正10~12年	1921~1923	近代和風建築調査報告書
水主神社	社務所	東かがわ市水主	軒棧瓦(3類+2類)		大正14年	1925	近代和風建築調査報告書
大内神社	拝殿	高松市鬼無町	4類	3類	大正14年	1925	近代和風建築調査報告書
願成寺	鐘楼	高松市庵治町	5類	3類	大正14年	1925	近代和風建築調査報告書
穴吹家住宅	旧店舗	高松市川部町	軒棧瓦(3類+2類)		大正後期	1920~1926	近代和風調査報告書
高柳旅館	主屋	高松市牟礼町	軒棧瓦(3類+2類)		大正末	1926?	近代和風建築調査報告書
塚田木材事務所	主屋	坂出市富士見町	軒棧瓦(5類+3類)		昭和元年	1926	近代和風建築調査報告書
綾菊酒造	東酒蔵	綾歌郡綾川町	4類	3類	昭和元年頃	1926?	近代和風建築調査報告書
綾菊酒造	仲酒蔵	綾歌郡綾川町	軒棧瓦(3類+2類)		昭和初期	1926?	近代和風建築調査報告書
宮武家住宅	主屋	丸亀市飯山町	軒棧瓦(3類+2類)		昭和4年	1929	近代和風建築調査報告書
願成寺	客殿	高松市庵治町	3類	2類	昭和4年	1929	近代和風建築調査報告書
長崎家住宅	主屋	東かがわ市引田	5類	3類	昭和5年	1930	登録文化財
宇夫階神社	社務所	綾歌郡宇多津町	3類	2類	昭和6年	1931	近代和風建築調査報告書
宇夫階神社	神輿蔵	綾歌郡宇多津町	3類	2類	昭和9年?	1934	近代和風建築調査報告書
善正寺	本堂	高松市川部町	3類・4類	2類・3類	昭和9~10	1934~1935	近代和風建築調査報告書
大超寺	本堂	高松市木太町	3類	2類(滴水型)	昭和11年	1936	近代和風建築調査報告書
穴吹家住宅	旧郵便局	高松市川部町	軒棧瓦(2類+2類)		昭和16年	1931	近代和風調査報告書 郵便局の瓦は主屋と同じものを使用
料亭二蝶	主屋	高松市百間町	軒棧瓦(5類+3類)		昭和25年	1950	近代和風建築調査報告書
船山神社	宝蔵	高松市仏生山町	5類	3類	昭和54年	1979	説明板

瓦の組み合わせが建築年代と異なると考えられるもの

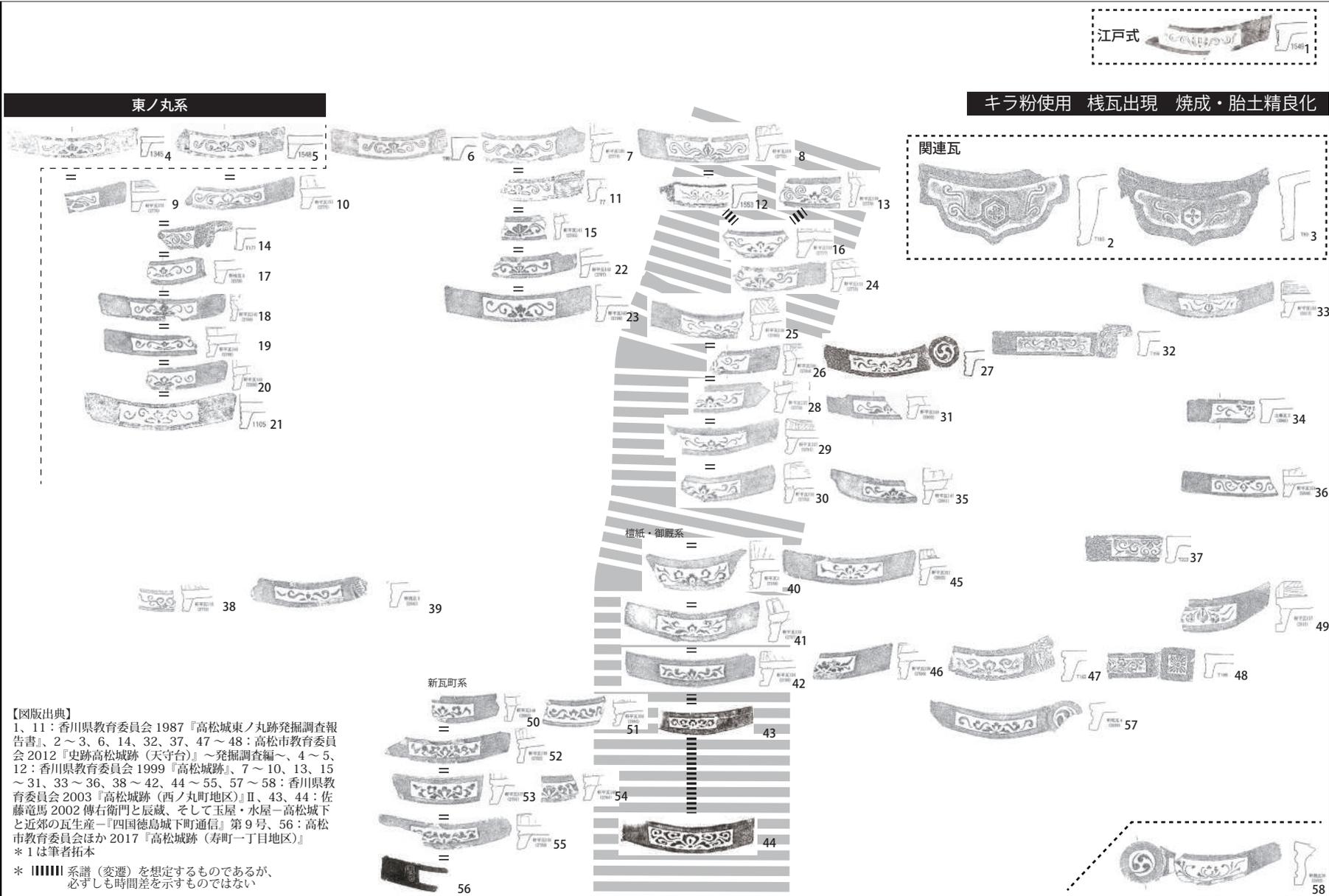


第1図 軒丸瓦瓦変遷図 (S=1/10)

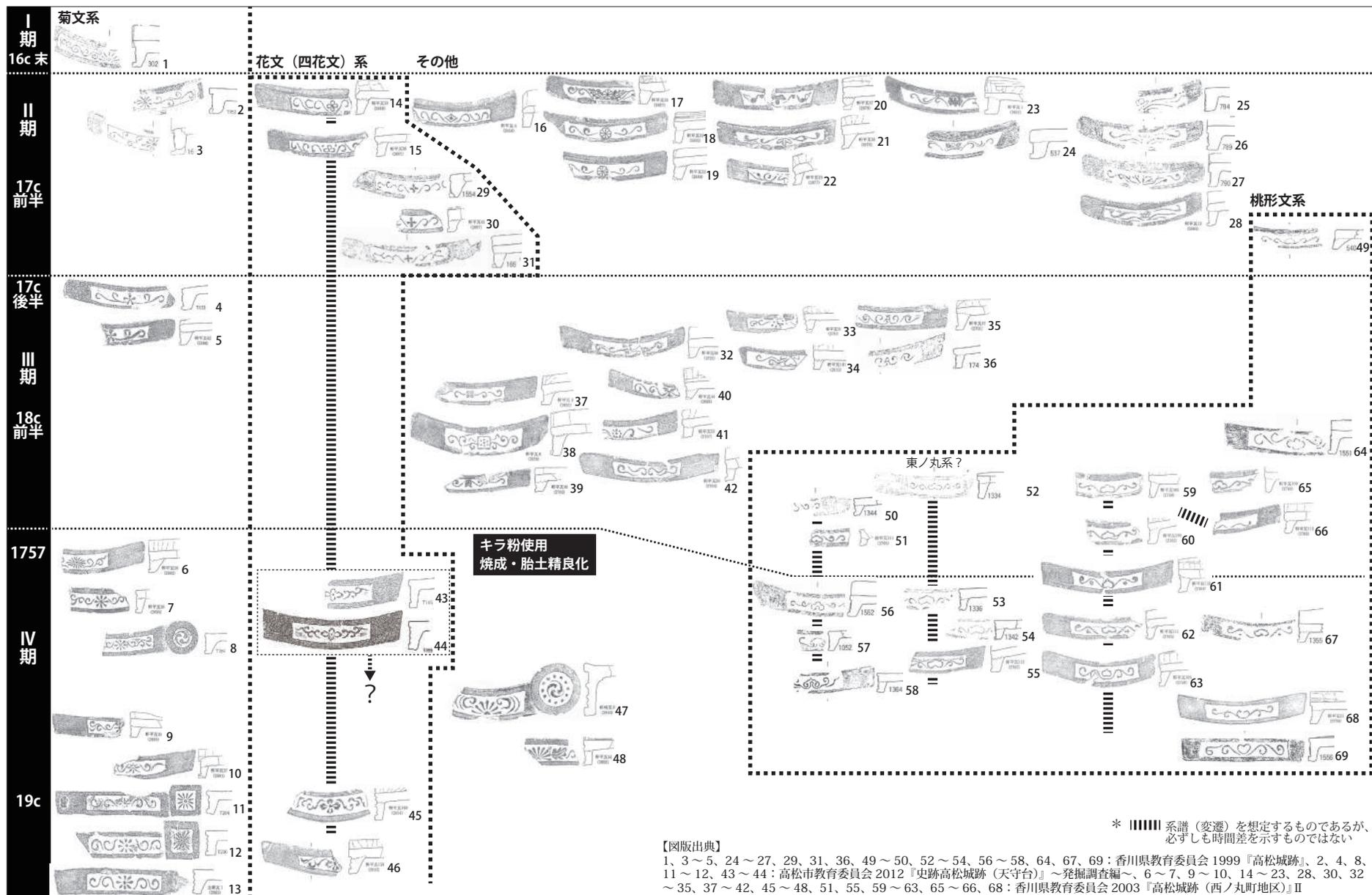


第2図 宝珠文・三葉文系・巴文系軒平瓦変遷図 (S=1/10)

1757  
IV期  
19c  
1854  
V期



第3図 半裁花菱文系軒平瓦変遷図 (S=1/10)

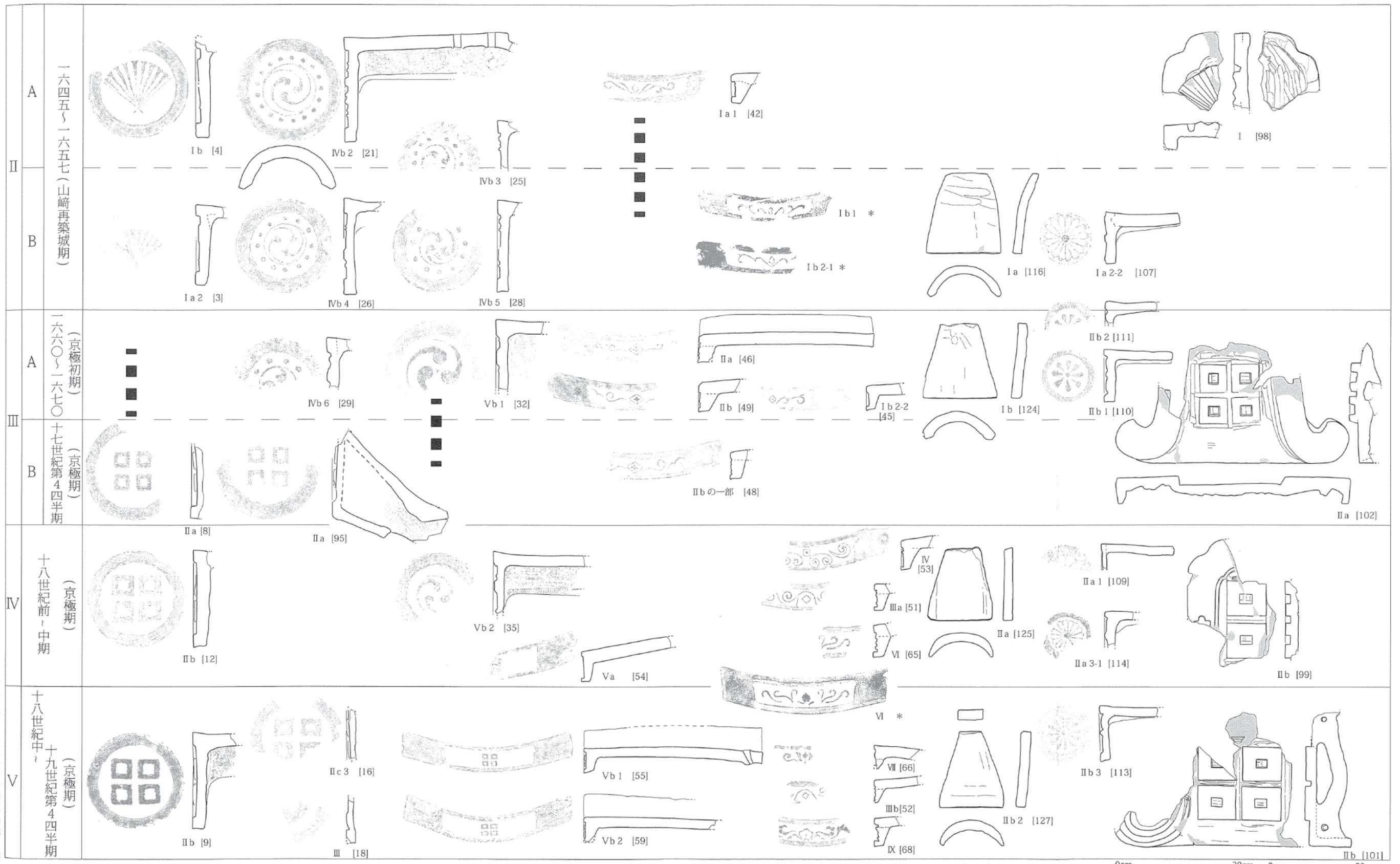


第4図 菊文系、花文(四花文)系、桃形文系、その他軒平瓦変遷図 (S=1/10)

	菊花文系	三葉文系	宝珠文系	渦文系	半裁花菱文系	蔦葉文系	そのほか・不明
<p>丸亀城1期 (17世紀後半)</p> <p>山崎・京極</p>				<p>a類</p> <p>b類</p>			
<p>丸亀城2、3期 (18世紀前半)</p> <p>宝永地震 (1707)</p> <p>京極</p>							
<p>丸亀城4期 (18世紀後半～19世紀初頭)</p> <p>主流系統の初源 安永7年天守瓦葺替</p> <p>京極</p>					<p>高松藩領主流文様 (胎土異、模倣?)</p>	<p>丸亀主流文様の普及 (キラコ使用)</p>	
<p>丸亀城5期 (19世紀前半)</p> <p>主流文様の定着 棧瓦の普及 多度津藩陣屋建設</p> <p>京極</p>		<p>文様の断絶?</p>		<p>文様の断絶?</p>		<p>a類</p> <p>b類</p>	
<p>丸亀城6期 (19世紀中頃～明治8年)</p> <p>刻印の多様化 武家屋敷解体に伴う多量の廃棄</p> <p>京極</p>	<p>少数派として存続</p>		<p>少数派として存続</p>			<p>c類</p>	<p>家紋瓦</p>

第162図 軒平瓦 変遷 (案)

香川県教育委員会ほか2018『丸亀城跡(大手町地区)』より



\*は堀家 [1981] から  
他は当発掘調査出土品で [数字] は遺物番号

0cm 20cm 0cm 20cm  
S=1/6 鬼瓦 (S=1/8)

第101図 丸亀城城郭部の瓦編年案